2012年11月19日

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニューズレター

２０１３全国大会開催告知特集号

編集発行
日本国際文化学会事務局
〒253-8550
神奈川県茅ヶ崎市
行谷１１００
文教大学国際学部
山脇研究室
tel 0467-53-2111
fax 0467-54-3722

第１２回全国大会 龍谷大学大宮学舎で開催

2013年7月6日～7日

大会実行委員長呼びかけ

大会実行委員長　佐々木英昭

龍谷大学大学院国際文化学研究科長

共通論題申込は
2012年12月末日（必着）

２０１３年、第１２回の日本国際文化学会全国大会を龍谷大学で開催させていただく運びとなりましたことを、大変誇らしく感じております。顧みれば十年を遡る２００２年、第１回の全国大会において当学会が健やかな産声を上げたのも、龍谷大学が国際文化学部を擁する瀬田学舎においてであり、そのことは、学会の創立自体にあって本学国際文化学部が一つの推進力であったことを物語ってもいます。この浅からぬ縁を固め直す好機としてこのたびの大任を拝受し、大会の成功に向けて大いに精進する所存であります。

龍谷大学国際文化学部は、琵琶湖岸に近い大津市瀬田のキャンパスに１９９６年に創設されて以来、様々な試行錯誤と変貌を重ねて参りましたが、２０１５年には京都市内の深草学舎に移転することがすでに決定しております。このたびの全国大会はそのお披露目の意味も兼ねて、瀬田ではなく京都で催したいのですが、その場合、どうせ京都にお出でいただくなら、深草よりむしろ本学発祥の地である大宮学舎で開催しようということになりました。

この学舎は1639年に西本願寺に設けられた「学寮」に起源をもち、1879（明治12）年落成の現在の建物のほとんどは貴重な初期西洋建築として国の重要文化財に指定されています。映画の撮影などにもよく使われているこの秀麗な校舎で、”明治の京都”を満喫しながらの国際文化学探究というのはいかがでしょうか……。どうぞ、おいでやす

【写真：大宮学舎本館（龍谷大学提供）】

共通論題発表者募集

第12回全国大会を開催するにあたり、共通論題と自由論題を募集します。

<共通論題>

企画された特定のテーマに関して、司会1名に2～4名のパネリストもしくは報告者による報告と討論で構成する。時間は原則2時間とする。

申し込みは、テーマのみの申し込み、または、より具体的に、司会者、報告者の候補者等を含めた企画の申し込みのどちらかとする。

いずれの場合も、企画名（テーマ）・申し込み代表者氏名・現職・連絡先・Ａ４で1枚相当の企画内容の説明をご提出ください。

＊宛先：第12回大会実行委員長宛
sasaki@world.ryukoku.ac.jp
応募締切：2012年12月31日必着

自由論題募集は６面へ

１　２　月　８　日　山　口　県　立　大　学　で

第１回「文化創成コーディネーター」教育プログラム研究会開催

–詳細は3頁へ–

国際文化学教育と「文化創成コーディネーター資格」
―研究と教育の目標明示化に向けて―

法政大学国際文化学部・国際文化研究科教授 JSICS第3代会長
熊田泰章

日本国際文化学会は、「文化創成コーディネーター資格」制度を学会が認定する国際文化学部等修了による能力資格として発足させるべく、その準備を進めることを総会において決定し、動き出しています。このような資格制度を設けることについては、学会内では、2008年度を第1回として継続している情報交換会において意見交換し、また全国大会でもフォーラム等を開催して関連する報告と討論を重ね、特に第9回全国大会（東海大学札幌、2010年）では、フォーラム＜「国際文化学部」教育の役割と課題＞に多くの方の参加を得て、その必要性を共通認識としました。ただ、これらの議論からは、その必要性が明らかになったばかりではなく、学会が資格認定の主体となる上での様々な検討事項が列挙されるに至り、意義についてはすでに賛成の総意が得られるところであるが、拙速に導入するのではなく、さらに議論を重ねて慎重に制度設計をすることになりました。

この間、私は2007年度・2008年度および2009年度・2010年度の会長を務め、学会での議論に積極的に加わり、関係各位のご協力を得つつ「国際文化交流プロデューサー」資格として常任理事会での検討提案を行ったこともあります。その後、2011年度・2012年度の若林一平会長を中心に本制度発足に向けての準備が進められ、具体化の運びとなったことは、まことに時宜にかなったことであると考えます。

本学会会員の多くの方が所属する「国際文化学部」「国際文化研究科」等は、この名称を用いることを含め、その教育内容に関し、個々の大学が独自のコンセプトを定めて、その下に個々に特色を打ち出したカリキュラムを構築しています。大学を取り巻く社会環境において、これらの国際文化学部等は、ゆるやかにディシプリンを共有する学類をなすものとして認定されるに至っており、入学者は、国際的文化研究への学びの期待を実現することのできる学部として希望し選択するのであり、また、卒業・就職においては、その学びの成果を、国際文化活動を中心とする職業活動に活用することをめざして社会に巣立っていきます。このことに鑑み、入学を志す際に、そして在学中にも、また就職のために応募する際にも、「国際文化学」によって修得する知識・知力・能力を、数多くの大学の「国際文化学部」等の学生が、その大学個々の独自性に加えて、国際的文化研究に関する共有の知的達成をなしえたこととして誇ることができるようにすることには、大きな意義があると言えます。

グローバリゼーションという言葉自体が陳腐化するほどにそのことが常態化した世界においては、「文化」という概念も、社会の営みにおいて、政治や経済と並立するものとしてとらえるのではなく、ある社会の複雑な人間活動の総体をさすものとして理解するべきなのであり、したがって、日本のみならず世界のいずれにおいても、最上位概念としての＜国際文化交流＞が遂行されるのであって、多岐にわたる＜文化交流＞による新たな文化創造の意義を学び、その実現に関しての実践的訓練を行い、卒業後、「文化創成コーディネーター」として活躍することは、それがどのような活動分野においてであれ、「国際文化学部」等の卒業生が引き受けるべき社会的使命であると信じます。今回、日本の多くの大学の「国際文化学部」等における研究と教育のめざすことを、学士・修士レベルにおける共通目標として明らかにし、これらの学部・大学院の卒業・修了によって学生が取得することのできる認定資格を設けることにより、国際文化学部卒業生がさらに力強く社会に貢献することができるように支援することが喫緊の課題であると考える次第です。

会員のみなさまへ：事務局より
下記は各学部長様あてに送った招請状です。
必要により個人あての招請状をお送りします。遠慮なくお申し出ください。

2012年11月5日

国際文化学関連学部学部長　様

日本国際文化学会
会長　若林　一平　（学会印）
学会事務局：〒253-8550
神奈川県茅ヶ崎市行谷1100
文教大学国際学部山脇研究室
電話 0467-53-2111
FAX 0467-54-3722

第1回「文化創成コーディネーター」教育プログラム研究会
－第4回国際文化学関連学部・大学院等情報交換会－
のご案内

拝啓　時下ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

平素より当学会事業にご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

このたびは、昨年の第3回に続いて第4回国際文化学関連学部・大学院等情報交換会の開催についてご案内申し上げます。今回はこれまでの情報交換会の経緯をふまえて本年7月に発足した「文化創成コーディネーター」教育プログラム検討ワーキンググループ（委員長・木原誠佐賀大学教授）からの報告と討議のための研究会として開催します。

各校におかれましてはカリキュラムの特色、運営の実情、解決すべき課題、大学間での共通カリキュラム設定の可能性、等についてお話しいただけたら幸いです。貴職の出席が困難な場合は代理の方の出席をいただきたく、加えて教務実務のご担当の方（教員あるいは事務職員）を同行いただけたらありがたく存じます。

会場は2013・2014年度学会事務局担当校の山口県立大学です。下記の開催要領をお読みいただき研究会にご参加いただきたくご案内申し上げます。

時節柄どうぞご自愛のほどお祈り申し上げます。

敬具

（裏面へ続く）

開催要領

1　日時：平成24年12月8日（土）13:30-17:30
2　場所：公立大学法人山口県立大学　新キャンパス看護栄養学部会議室
　住所：753-8502 山口県山口市桜畠3－2－1　TEL:083-928-0211（大学代表）
　TEL:083-928-3423（学部事務室）　　e-mail:kokusai-jimu@fis.ypu.jp
　アクセス：http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/annai/gaiyo/syuuhen.html

【山口県立大学からのご案内】
　送迎バス：山口宇部空港12:30ごろ（ＡＮＡが12:05着、ＪＡＬが12:15着です）
　新山口駅発13:00ごろ（佐賀・福岡方面から12:05着、京都・大阪方面から12:01,12:16着等があります.駅で少しお待ちいただくことになりますが、空港から新幹線口を経由して大学に行きます。）
　お帰りは、会議終了後すぐに大学バスで本学を出れば、山口宇部空港に行かれる方はＡＮＡ18：55発東京行最終便、JAL19:15東京行最終便に間に合います。
　湯田温泉、新山口駅行きも必要に応じて別途出そうと思います。

3　出欠について
　１１月３０日までに学会事務局宛にお返事をください。<jsics2011@gmail.com>まで
　出席の場合は到着予定時間とどちらの場所（山口宇部空港あるいは新山口駅）にご到着予定かをお教えください。

4　次第
　（１）開会挨拶　5分　日本国際文化学会会長より
　（２）2013・2014年事務局担当校挨拶
　　山口県立大学国際文化学部 岩野雅子学部長　10分
　（３）「文化創成コーディネーター」教育プログラム検討ワーキンググループ」報告
　続いて
　参加大学の現状報告と問題提起
　各報告　発表　10分　質疑　5分　とします。
　恐縮です。A4用紙1枚片面に要旨をまとめていただき
　12月6日（木）までに
　e-mail:kokusai-jimu@fis.ypu.jp 宛お送りいただければ、配布等の準備をいたします。

　（４）（３）の終了後に各報告について討論　30分

以上

An Intercultural Journey to North Korea 2012 Summer

WAKABAYASHI Ippei, An intercultural tourist

> What is history?, is that it is a continuous process of interaction between the historian and his/her facts, an unending dialogue between the present and the past.
>
> - Edward Hallett Carr, 1961

The road to Panmunjom(板門店) from South then North

I made a study trip to Panmunjom from South Korea with my seminar students in 2010 summer. A South Korean guide was very nervous about many rules. No jeans, no sandals, no short pants, no short sleeves, no photos outside buses, etc., while I have heard that the same tour from North is a relaxed one. I decided to go to North Korea to know the reality.

On August 25 in 2012 I arrived alone at Pyongyang airport from Shenyang China. Next morning I went to Panmunjom with my guides, Mr. Jiang and Mr. Li, via the old Koryo (高麗) capital Kaesong(開城). In fact Panmunjom tour from North was a relaxed entertainment. No dress codes, no camera rules, etc. Panmunjom is a visible entity of the cold war in East Asia. Our study trip from South was strictly controlled by the United Nations forces, namely the U. S. army. In short South Korea is not an independent player in the cold war scheme, while North Korea is a relatively independent player. In my view this is why they are relaxed.

With a soldier

Pyongyang Declaration 2002: who disrupted?

Secondly I wanted to know how north people think about Japan-DPRK (North Korea) Pyongyang Declaration signed by Premier Koizumi and Chairman Kim Jong-Il on September 17, 2002.

The Declaration says, “The Japanese side regards, in a spirit of humility, the facts of history that Japan caused tremendous damage and suffering to the people of Korea through its colonial rule in the past, and expressed deep remorse and heartfelt apology.” Right after this follows, “Both sides shared the recognition that, providing economic co-operation after the normalization by the Japanese side to the DPRK side, including grant aids, long-term loans with low interest rates and ...” (from MOFA Japan website)

The above is a memorial stamp of the Declaration signing ceremony printed in North Korea, which I bought at Stamp Museum Pyongyang on August 27. Pyongyang declaration might have been the very basis for Japan not to be isolated from East Asian Community. Premier Koizumi should be reevaluated as a brave Statesman who began a normalization process with the country that U. S. president regarded then as an evil of axis.

Suddenly soon after the declaration someone disrupted Japan’s peace process with North Korea.

August 15 as a domestic icon of Imperial Japan

I have met the past of Japan. I was watching a calendar in my hotel room. August 15 is a holiday of North Korea, the liberation day from Imperial Japan. In Japan the same day is the End of War Day. Yet an important point is that on August 15 Emperor Hirohito announced the surrender to Imperial Japanese People.

In short August 15 has the meaning only inside Imperial Japan. Precisely the war cannot end on the domestic anniversary. Therefore if we cannot review all of the relational structures with foreign countries, we will continue to be isolated from East Asian community. This is the essence of territorial disputes today.

Not a country like Iraq

When I asked Mr. Jiang about Songun (先軍政治), a military first policy, he answered, “we won’t become a country like Iraq.” Generally my impression is that North Korean people might be poor but they are honest, which we have lost a long ago.

第１２回全国大会自由論題募集

応募締め切りは2013年3月31日

写真は大宮学舎正面（龍谷大学提供）

<自由論題>

1 個人研究発表とする（内容により、複数の発表者による発表も可とするが、その場合も1名分の時間とする）。時間は質疑応答も含めて30分とする。

2 応募は日本国際文化学会の会員に限る。ただし、現在会員でない方は、申し込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得ることとします（入会の申し込みは学会事務局へ）。

3 氏名・現職（大学教員・有識者の場合は所属と肩書き、大学院生・学生の場合は在籍課程などを明記）・連絡先・発表題目・キーワード（3〜5語）を冒頭に記し、発表要旨（40字×25行以下）を付けて、電子メールで以下宛にお送りください。

なお、申し込み時に提出していただく発表要旨が、そのまま大会時に配布される要項集に掲載されますので、ご注意ください。

＊宛先：第１２回全国大会実行委員会宛
応募締切：2013年3月31日必着
応募先：電子メール
sasaki@world.ryukoku.ac.jp

写真は大宮学舎夜景（龍谷大学提供）

編集後記

◆今号は来年の全国大会の特集そして文化創成コーディネーターの特集、計２つの特集を組んでいます◆全国大会、まずは「共通論題」の応募に期待します◆共通論題は学会の顔と言えます。是非充実させたいものです◆自由論題への活発な応募に期待します◆北朝鮮紀行はこれまで縁の薄かった土地だけに興味深いです。（KH）